

2023 年 5 月 28 日（日）「聖霊の御業」

使徒 5:12-16

12 使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われた。一同は心をつにしてソロモンの回廊に集まっていた。13 ほかの者は誰一人、あえてその仲間に加わろうとしなかったが、それでも、民衆は彼らを称賛していた。14 そして、主を信じる者が男も女もますます増えていった。15 ついに、人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせ、ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも誰かにかかるようにするほどになった。16 また、エルサレム付近の町からも、大勢の人が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まって来たが、一人残らず癒やされた。

【序論】

私たちが毎年ペンテコステ礼拝を守るところには、どのような意味があるのでしょうか。ペンテコステとはユダヤ暦における「五旬節」のことであり、過越の祭から数えて 50 日後に行なわれる小麦の収穫の祝いです。キリスト教の歴史ではその日に信徒一同に聖霊が降ったことから「聖霊降臨日」と呼ばれるようになりました。その後の歴史において繰り返しこの日が祝われてきましたが、それは信者の中に聖霊が住んでおられることを証しするためだと思います。聖霊が共におられると、信徒を通して何が行なわれるかが使徒言行録全体を通して教えられている。だから、ペンテコステには使徒言行録のどの箇所から語ってもよいのではないかと私は考えています。実際、使徒言行録の中には聖霊の著しい御業が記録されていますが、それは現代においても何らかの意味で起こりうることでしょう。私たちにも何かが起こることを信じ、期待して、今日の御言葉を学んでいきたいと思います。

【本論】

少し文脈の説明をさせていただきますと、今日の箇所の直前（5:1-11）には、アナニヤ・サピラ夫妻に下った裁きが記録されています。これは昨年扱った箇所ですが、この夫婦は個人で保有していた地所を売り払ってその一部を献金に充てたのですが、それで全額だと偽ったことによって神の怒りにふれ、命を落としました。彼らは純粋な心でさげたのではなく、バルナバの多額の献金を見て対抗意識を燃やしたためにそのようなことをしたようです。それで命を落とすとはあまりに厳しい裁きに感じられますが、神の聖が教会の中に現された一つの決定的な事件として読者の脳裏に刻まれました。神を侮ってはならないことが、全歴史の教会に示されたのです。そして、ここには教会の霊性の管理を委ねられた使徒の權威も表されていました。

本論 1. 心一つに

この事件を受けての今日の箇所になりますが、ここにはもう一つの使徒の権威が表されています。

使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われた。一同は心を一つにしてソロモンの回廊に集まっていた。(5:12)

使徒たちに与えられていた権威とは、「**多くのしるしと不思議な業**」を行なう力です。より具体的には、16 節に書かれているように、「**病人や汚れた霊に悩まされている人々**」を解放する力でした。これはまさに、主イエスがなさった御業そのものであり（マルコ 1:32-34）、彼らは主イエスの権威を帯びてこの業を行なっていたのです。そして、その力を直接的にもたらしていたのが彼らの内に住んでおられた聖霊でした。

12 節の後半で重要なことが言われているのですが、それは「**一同は心を一つにして……集まっていた**」ということです。どんなに一人一人が主イエスに結びついていても、心が割れていては主の御業は現れません。同じ信仰を持ち同じ聖霊を宿す者が一致して共に祈っているところには、大きな神の御業が現れるのです。この時、ユダヤ人によるキリスト者への迫害が激化してきていましたから、集会を持つということ自体が危険を伴うことでした。しかし、彼らはますます熱心に集まり、共に御言葉を学び、賛美をささげ、祈っていたのです。

彼らが集まっていた場所について「**ソロモンの回廊**」という具体的な名称が与えられています。これは神殿の東側に沿って高い柱が立ち並ぶ公共の場で、誰でも来ることがゆるされていた所でしたからⁱ、使徒たちが教えを宣べるのに絶好の空間でありました。エルサレム神殿の最初の建設者ソロモン王の名が付けられ、親しまれていた場所であったと思われます。神殿はユダヤ教最高議会の本拠地でありますから、そこで語るということが如何に危険な行為であったかを考えなくてはなりません。彼らは既にナザレのイエスの名によって語ることを禁じられていたのです（4:17）。しかし、その禁令を他所に、語るのみならず様々な癒しの業を行なっていました。

民衆が関心を寄せたのは、おそらく「教え」以上に「癒し」だったのではないのでしょうか。病が癒され、悪霊を追い出してもらえる。使徒たちの手の業を通して、とてつもない奇跡が次々に起きているのです。当時、貧しい人々はろくな医療も受けられず、病気が悪化の一端を辿っていた人も多かったのでしょう。中にはオカルト的なものに頼ることで悪霊と関わりを持つようになってしまった人もいたと想像します。聖霊はこれらの縄目から人々を解放してくださったのです。そういえば、使徒たちがかつてこのように祈っていたのを思い起こします。

主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、堂々と御言葉を語れるようにしてください。どうか、御手を伸ばし、聖なる僕イエスの名によって、病気が癒やされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。(4:29-30)

この祈りに主は応えてくださいました。この祈りを私たちのものとしたい。

本論 2. 敬意と畏れ

ほかの者は誰一人、あえてその仲間に加わろうとしなかったが、それでも、民衆は彼らを称賛していた。(5:13)

「ほかの者」が誰を指しているのかがやや不明瞭ではありますが、これは信仰に入っていない人々のことを言っているのでしょう。彼らの態度を読み取るならば、使徒たちが行なう業を見て畏敬の念を抱き、それでも一步を踏み出すことができず、遠巻きに眺めていたということでしょう。彼らは敵対する気持ちもなかったけれど、「その仲間に加わろうとしなかった」。この微妙な距離感を保ち続ける人も少なくないでしょう。聖霊の御業を見て驚き拍手喝采はするものの、信仰には至らないのです。それを妨げている何かがある。彼らは、キリスト者になることはリスクが伴うということを知っていたのでしょう。ユダヤ社会で不利な立場になることを彼らは恐れたのです。使徒たちのように、反対されても大胆に語り、癒しの御業を行なう姿勢とは全く違います。彼らが信仰への一步を踏み出すためには、どうしても聖霊の介入が必要でした。聖霊は恐れを取り去り、如何なる相手に対しても大胆に信仰を告白させます。

そして、主を信じる者が男も女もますます増えていった。(5:14)

この人々は、聖霊の働きを受け入れたのです。彼らは、本物を見分ける目を持っていました。使徒たちの業がどこから出ているものであるかを見極めることができた。それは、ナザレのイエスの御名によるものであることを悟りました。悟るだけではまだ足りません。その先の信仰告白へと導くのは聖霊の働きによるのです。「男も女も」という表現は、家族ぐるみで救われたということのように聞こえます。聖霊の御業は、性別を超え、年齢を超え、この世の地位を超え、救いを求めるすべての人にもたらされました。求める心さえも、与えてくださるのは聖霊なのです。

本論 3. 癒し(愛)による使徒の権威の証

ついに、人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせ、ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも誰かにかかるようにするほどになった。(5:15)

使徒たちの中でも、中心的に主の御業を行なっていたのはペテロであったことが明らかにされています。それにしましても、「病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせ」という状況を想像しますと、民衆はもはやなりふり構わず病に苦しむ身内や友を連れて来ていたことが分かります。サラッと書かれていますがこれはすごい熱気です。押し合いへし合いの騒動が起きていたのではないか。ペテロはその光景を過去に見たことがありました。そう、主イエスのときにも全く同じだったのです。しかし、それが一介の弟子である自分たちにおいても起きている。聖霊が彼らに力と権威とを与えてくださったのです。

「ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも誰かにかかるようにするほどになった」とあるように、これはもはや迷信的・魔術的な信仰であり、半狂乱になった群衆の姿が思い浮か

びます。古代世界では、影に魔術的な力があると考えられていたようです。群衆が第一に求めていたものとは「癒し」でありましたが、聖霊はその必要にことごとく応えてくださいました。彼らに信じる心を興させてくださったのも聖霊です。福音書では、「信仰への答え」として癒しが与えられた例が少なくありません。

また、エルサレム付近の町からも、大勢の人が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まって来たが、一人残らず癒やされた。(5:16)

「エルサレム付近の町からも」と具体的な地名が登場しますが、著者はユダヤ教の本拠地で宣教が進み始めたことを読者に伝えたいのでしょう。困難な地にあつて、聖霊の御業は広まっていったのです。

【展開】

今日の箇所で重要なポイントは、使徒たちは敵対者からの圧迫を受けていましたが、彼らと論争するのでもなく、武器を持って立ち向かうのでもなく、むしろ「癒し」の力をもって積極的に民衆の困窮に答えていったことです。ことばを信じない人々もいたかもしれませんが、御業はその「ことば」が事実であることを示したのです。つまり、イエス・キリストは「愛」であるということ、人をあらゆる縄目から解放する力ある神であることがここに明らかにされました。使徒たちは、自分たちの戦いが「人間に対するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊に対するもの」(エペソ 6:12)であることを知っていました。敵対者の背後にいる存在が何であるかをよく認識していたのです。

【結論】

私たちも、時代は違えど、同じ聖霊を求めることができます。聖霊の内在によって、私たちを通して御言葉が宣べ伝えられ、求める人には癒しの賜物も与えられるかもしれません。そのことを大胆に祈り求めてよいのです。賜物は貪欲に求め続ける必要がある。主イエスが地上で行なわれたと同じ御業が、私たちを通して世にもたらされるのです。これから先、何らかの迫害があつたとしても、私たち取るべき態度とは、祈りに基づく愛の業であり、今より聖霊の満たしと働きかけを求めるべきではないでしょうか。

【祈り】

聖霊なる神様。今年も敬愛する皆様と共にペンテコステ礼拝を守れることを感謝いたします。使徒言行録に記録されていることは、御伽話ではなく、遠い昔の物語でもなく、今も生きて働いておられる聖霊の御業です。私たちにもイエス・キリストの力を現してください。人が癒され、解放されるのを、この目で見るができますように。そして、私たちも使徒たちと同じように、愛することによって悪と戦うことができるようお助けください。

【祝禱】

仰ぎ願わくは、

聖徒が心合わせて集まるところに、共にまし給う、父なる神の愛、

求める者に豊かな賜物を与え、愛の業を行なわせ給う、主イエス・キリストの恵み、

善をもって悪に報い、キリストを証しさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。

